

行う基本的な単位は「同行(どうぎょう)」と呼ばれる。例えば、棚経では初盆のあった家に故人と同じセコ(北黒田内の下の組織としての組)の戸主が集まり、このうち年長者から「鈴とり」を出し、この鈴とりが導師役を務める。このとき、地区の寺院から僧侶は呼ばず、読経はすべて住民で行われるので、同行を真宗的な講組織として見ることができるかもしれない。しかし、歴史的にはともかく、現在では同行という語の用いられ方は、「○○の同行のSさんが詳しい」や「△△の同行が今年の当番」といったように使われており、必ずしも真宗的講とは言えない面がある。

次に、②では例年二月一四日に「大般若経転読粥占い」、通称「大般若」が行われている。これは地区に曹洞宗の寺院の僧侶を読んで大般若経を転読する傍ら筒粥形式の粥占を行うものである。この行事の起源伝承として語られるのは、地区に真宗が伝わる以前の宝幢院という寺の僧侶に関係しているが、今までのこの行事が続けられてきた経緯には時代によって担い手や地域が置かれた特殊な状況が関連していると思われる。例えば、近世期には、大般若は「領主御祈禱」を目的として行われた祈禱儀礼であり、その中心的な担い手は「無足人」と呼ばれる津藩(後には久居藩)に組み入れられた郷士であること、担い手たる無足人たちは明治維新後に「士族復族願」を出すなど、彼らの置かれた状況にアイデンティティを持っていたように思われることが挙げられる。また、明治以降はこれらの無足人を中心とした担い手から、北黒田村全体で祭礼が担われるようになるがここでは行事の担当をセコ(通常「同行」と呼ぶ)

が担う輪番制が導入され、儀礼の存続するメカニズムが生成されたことが挙げられる。

本発表では真宗高田派の一村落の民俗の諸相をなるべく細かく見ることによって地域での真宗行事を客体化し、また非真宗的行事が存続されている経緯について分析を行ったが、こうした真宗優勢地帯を対象として宗教民俗学の領域内で研究していくさらなる工夫や分析視覚が必要であろう。

宗教民俗学における現世利益信仰の位置

阿部 友紀

現世利益信仰について言及することは、アンバランスな二つの視座のあいだで行なわれてきたといえる。一方においては、民衆の信仰の「実態」として現世利益をとらえる視座であり、また他方では民衆の「迷信」であり、まともにとりあげるまでもないという視座である。そのような視座において現世利益信仰は、宗教者と民衆、組織宗教と非組織宗教、宗教の本質または宗教の形骸化など多様な捉えられ方をしてきたといえる。本発表では、現在において現世利益信仰の理解が、どのような位置づけをもつてなされているのか、以下の四点を指摘した。

一つには、現世利益信仰をもって日本仏教の特質または基底とする視座である。民衆が仏教寺院に対して様々な要求を行い、また寺院の方もその要求に応答してきたことは周知の事実である。具体的に民衆は寺院に何を要求してきたのか、たとえば圭室諦成は、葬祭の儀礼・治療の呪術・招福の宗教の三点を提示している。これらのうち治療の呪術・招福の宗教は、まさ

に現世利益といえるだろう。そして圭室は『葬式仏教』において、日本仏教はまず治療・招福の仏教として定着していき、最後に葬祭仏教が民衆に定着していったと認識している。同様に中村元においても日本の初期仏教を現世利益的と規定しており、その視点は現世利益をもって日本仏教の基底としている点において共通したものである。

二点として仏教者による現世利益理解を指摘したが、藤井正雄の言によれば、仏教学の立場からは、少なくとも仏道修行の結果として現世利益は認められるが、利益を受けることを目的化することは認めていないということになる。しかしながら仏教者はそのような教義と民衆の現世利益的欲求の隘路で、現世利益を反仏教的として否定する視座と民衆を仏法に導く方便として肯定的に捉える視座の二つの選択肢をたどったとみている。この二つの選択肢の間において、現世利益は民衆の生活欲求の一形態と捉えられてきた。この仏教学の消極姿勢に対して五来重は痛烈に批判し、民衆の仏教こそ真の仏教という観点から、現世利益信仰は五来が体系化する「仏教民俗学」に位置づけられていく。

次に宮田登、イアン・リーダーの言説をもとに民俗宗教論における現世利益理解を論じた。宮田の現世利益理解は、辻善之助によって提唱された近世仏教Ⅱ仏教墮落論という仏教の語り方から距離を置き、民衆の中に息づいている仏教を「生きた仏教」としてとらえる視座に接続されているといえる。同様の視座は「民衆の中の仏教」に関心を持つ宗教学者にも共有されているものであり、イアン・リーダーにおいても、教義的な仏教

と比較され、不当な地位にあったとする現世利益信仰を取り巻く研究状況を踏まえつつ、現世利益信仰が民衆の宗教行動や思考の主なる問題になることを示唆しているのである。

最後に、このような現世利益信仰理解の転換になったのは、一九七〇年に発刊された日本仏教研究会編『日本宗教の現世利益』であったとし、当時の新宗教の隆盛のなか、その原動力は現世利益にあるという認識があり、翻って仏教と現世利益の関係を多角的に問う試みではなかったかと考察した。そしてそのような試みから、個別の論説間には相違があるものの、旧来の消極的で二律背反的な現世利益理解から、民衆と宗教の関係を肯定的に位置付け、対立構造から相互作用へと転換された現世利益理解が共通化していったといえる。『日本宗教の現世利益』は、そのような現世利益理解転換のための孵化器のような役割を果たしたのである。

よさこい系祭りの組織的特徴

芳賀 学

一九八〇年代以降の日本社会においては、主として、都市化（郊外化）と共同体の解体によって、伝統的な多くの祭りが衰退する一方で、阿波踊り・サンバ・郡上踊りなどの祭りは、従来行われていた地域から日本各地へと伝播拡大する傾向にある。本報告においては、こうした祭りの中でもっとも広範に拡大している「よさこい系祭り」を取り上げる。「よさこい系祭り」とは、一九五四年に高知市で生まれた「よさこい祭り」に起源をもつ祝祭群の総称である。この種の祭りは、四〇年近